

聖書：I コリント 1：2、I ペテロ 1：15～16

説教題：教会の聖性

日時：2015年2月1日

ニカイア・コンスタンティノポリス信条（381）に「唯一の、聖なる、公同の、使徒的教会」と告白されています。昨年は「教会の唯一性」というテーマでお話しさせていただきました。今日は二つ目の「教会の聖性」について聖書から共に学びたいと思います。

教会は聖なるものであるということ。観念的には分かる気がしますが、現実の教会についてこれは言えることなのでしょうか。「私が属している教会は本当に聖なる教会です」と心から他の人に言える教会は幸いです、必ずしもそういう教会ばかりではありません。むしろ教会で私はつまずいた！と言う人もいるものです。もちろん、つまずいたと語る人の側に問題がある場合もありますが、現実の教会が決して完全ではなく、多くの汚れと傷を持っていることも事実と思います。

I ペテロ 1 章 16 節には、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。」とありました。神が聖であられることは誰も異存ありません。またその民も神にふさわしく聖なる者でなければならないということも論理的にはそうだと思います。しかし現実はどうでしょう。これが自分たちに当てはまるようにはとても思われぬ。第一、神が聖であるように私たちも聖であるということなど可能なのか。ここを読むたびに、とてもこれを満たせそうにない自分たちを思ってストレスがたまるだけ。そんな思いを持つ人も少なくないかも知れません。

この相違を解決するための一つの取り組みは、従来の教会から分かれ出て純粋な教会を作ることです。すなわち聖なる人々だけから教会が構成されるように注意し、これを保とうとするあり方です。反対から言えば、聖とは言えない人は排除することになります。歴史の中でこの立場を取った人たちとしてよく取り上げられるのは 4 世紀のドナティストあるいはドナトゥス派と呼ばれる人たちです。ローマ帝国による迫害で一度は棄教した人が、迫害が終わって帰って来て聖職者を任職した時、彼らはそれを無効だと言って受け入れませんでした。なぜならその人は裏切り者であって、聖なる人でないからです。迫害下でも信仰に踏みとどまった人たちで、純粋な教会が維持されて行かなければならない。

あるいは宗教改革時のアナバプテストもそうです。彼らも純粋な教会を建て上げるべく、真に回心した者のみからなる教会を主張しました。従って幼児洗礼は認められません。信仰告白しないかもしれない幼児を教会に加えることは、教会の純粋性を弱めるからです。汚れたこの世からの徹底的な分離も彼らは主張しました。また教会をきよく保つための戒規も重要です。汚れた者を教会に存在させないように、戒規はその人々を放逐する手段です。こうして教会は義人の集まりであることができる。果たして教会の聖性はこのようにして求められ、維持されて行くものなのでしょうか。

しかし、聖書には驚くべきことが述べられています。Iコリント1章2節でパウロはコリント教会を「聖徒として召され、キリスト・イエスにあつて聖なるものとされた方々へ」と言っています。コリント教会には多くの問題がありました。プライドの問題、分派の問題、性的不道徳の問題、また礼拝に関する問題、賜物の誤った使い方の問題、等々。ところがパウロはそんな彼らに呼びかけるにあたって「コリントにある悪臭漂う教会よ」とは言わないで、「聖なる者とされた方々へ」すなわち「聖なる教会へ」と言っています。これはどういうことなのでしょうか。

まず「聖」という言葉について知っておくべきは、この基本的な意味は「切り離される」とか「取り分けられる」という意味であることです。すなわち神の御用のために他から区別されること、聖別されることです。クリスチャンは「聖徒」と言われていますが、その第一の意味は神へと取り分けられた者たちということです。従って私たちは当惑しながら、この言葉を使う必要はないのです。自分は最近あまり良い生活ができていないから聖徒とは言えないとか、逆に自分は最近良く神と交わり、きよい生活を送っているから聖徒と呼ばれるのも悪くない、などと。自分を見てではなく、こんな私を取り分けて下さった神の恵みを感謝して、私たちはこの言葉を自分に当てはめて使って良いのです。

しかし、神によって聖なるものとされるとは、神のものとして選り分たれることと同時に、その神にふさわしく汚れや腐敗からきよめられることも意味します。Iコリント1章2節で彼らは「聖なるものとされた方々」と言われていますが、彼らは神に取り分けられただけでなく、その神にふさわしく道徳的にきよめられた人たちでもある。どうしてそう言えるのでしょうか。それは「キリスト・イエスにあつて」と言われています。すなわち彼らのきよさは彼ら自身に由来するのではない。先に見たドナトゥス派やアナバプテストは、教会のきよさを考える時に教会の構成員に注目し

た。しかしパウロは「キリスト・イエスにあつてきよい」と言っている。すなわち教会のかしらが聖なので、そのからだも聖である。教会の聖性の根拠はかしらなるキリストの聖性に基づいているのです。

そして、注目すべきは「聖なるものとされた」と言われていることです。ここでは完了形が使われています。すなわち過去のある時点でこの状態が発生し、それからずっとこの状態が続いている。パウロはここで彼らが事実として「聖なるものである」と言っているのです。

私たちは義認の祝福はイエス・キリストを信じた最初の時点で与えられるが、聖化はその後から少しずつ与えられる祝福であると考えているかもしれません。しかし1コリント1章2節から分かることは、聖書は聖化を長いプロセスに渡るものに限定していないということです。生涯に渡る継続的な聖化と共に、信仰を持った最初の時点の決定的な聖化のことも聖書は語っている。1コリント6章11節：「あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」ここにも義認と同時に与えられる、最初の時の特別な意味での聖化があると言われています。

これはイエス・キリストとの結合によって私たちに与えられる祝福です。私たちはイエス様と結ばれることによって義認の祝福を頂きます。イエス様の完全な義のゆえにさばかれることなく、神との正しい関係に導き入れられます。しかしそれだけではないのです。キリストと結ばれることによって、キリストが持つ「聖」も私たちに分け与えられるのです。すなわち私たちをきよめる力も私たちに入ってくるのです。そこで根本的な生まれ変わり、根本的な変革が私たちの内に生じます。その結果、私たちは神への心からの愛を持つようになります。確かにその後も、絶えず自己中心との戦いがあるとは言え、神を心から愛し敬うというそれまで持っていなかった性質を決定的に持つようになり、最後には必ずこの力が勝利します。ローマ書7章22節の「神の律法を喜ぶ」心もそうです。ですから私たちは以前の私たちと同じではないのです。私たちはこの祝福を今朝、改めて感謝したいと思います。教会はただ気の合う者たちが集まる社交クラブではありません。教会はキリストにあつて聖なるものとされた者たちの集まりです。私たちはこの神の恵みを心から感謝して、教会を聖なる教会と告白して良いのですし、また神を賛美してそのように告白すべきなのです。

さて、私たちがこのような聖めの祝福にあずかっていることは、そこに満足して止まってしまつて良いということを意味しません。神はなお最終的な聖化に向かう歩みを私たちに命じています。Ⅰテサロニケ 4 章 3 節：「神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。」 4 章 7 節：「神が私たちが召されたのは、汚れを行なわせるためではなく、聖潔を得させるためです。」 Ⅰペテロ 1 章 15～16 節：「あなたがたを召してくださった聖なる方にならつて、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。それは、『わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない』と書いてあるからです。」

とても無理な注文ではないでしょうか。しかし、大事なのは、先に見た決定的聖化という聖書の教えでしょう。もし私たちがこれを受け止めず、自分は本質的に以前と何も変わっていないと考えるなら、聖なる神に似るようにとの命令はあまりにも重すぎるものになります。しかし私たちが今や新しい恵みの力の下にあつて根本的な聖化の恵みを受けているなら、そのキリストの力により頼んで取り組むことが可能になります。聖化は私たちの知性、感情、意思という全人格の関わりを通して成し遂げられて行きますが、それは私たちの力によってではなく、キリストがくださる力によって成し遂げられて行くものです。ピューリタンたちは、この聖化のために外的な恵みの手段を勤勉に活用することを大事にしました。第一の手段は御言葉です。ヨハネ 17 章 17 節：「真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。」特に説教を通して、とピューリタンは告白しました。ウェストミンスター小教理問答問 89 の答「神の御霊が、御言葉を読むこと、特に説教を、罪人に罪を自覚させて回心させるため、また信仰によってきよめと慰めの内に救いに至るまで建て上げるために、有効な手段とされます。」次に聖礼典もそうです。聖礼典は見える御言葉と言われます。この後、聖餐式にあずかります。これを正しく用いることによってキリストの豊かなきよめの導きに養われることができる。祈りもそうです。教会訓練もそうです。戒規と呼ばれる罪を犯した人への矯正的訓練ばかりでなく、互いの徳を高め合うための相互訓練・相互牧会もあります。私たちは単独で聖化を求めるのではなく、教会という共同体の中で、互いに支え合い、組み合わされる歩みの中で、私たちをきよめるキリストの導きにあずかるのです。

「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。」これは神が私たちのために持っていてくださるビジョンです。私たちはただこの命令を受けている

のでなく、すでに決定的聖めにあずかっています。その恵みを頂いて、聖なる教会、主の杉並教会の一員としての歩みを導かれていることを感謝したいと思います。その私たちは、聖性というこの特性をさらに発揮して、神を映し出す歩みをし、神にすべての栄光を帰すようにと導かれています。そして私たちの天の父があがめられる歩みをささげるようにと導かれています。最後に I テサロニケ 5 章 23～24 節のパウロの祈りを読んで終わります。「平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだが完全に守られますように。あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをしてくださいます。」